

巻頭言

環境情報学部設立 15 周年、 情報メディア学科設置 10 周年を記念して

吉崎 真司



2011 年は、環境情報学部設立から 15 年、情報メディア学科設置から 10 年目の節目の年でした。学部が設立された 1997 年の 2 年前、すなわち設立準備が始まった 1995 年には阪神淡路大震災、地下鉄サリン事件が発生しました。1997 年にはロシアのナホトカ号による重油流出事故、東海村の爆発事故による放射能汚染、そして京都では気候変動枠組条約締約国会議が開催されました。環境省が作成した「環境関連の記事数の推移」というデータを見ても、1989 年からリオサミットが開催された 1992 年まで一気に増加し、その後は一時減少しましたが、1997 年以後再び増加しています。一昨年には名古屋で生物多様性条約の締約国会議が開催されるなど、環境への理解は深まっています。

一方、1995 年頃から急速に普及し始めたインターネットは瞬く間に社会に広がっていき、情報が世界中をあっという間に駆け巡るようになりました。また、同時に IT 技術が社会の中で重要な位置を占めるとともに、個人や企業の情報の保護、すなわち情報セキュリティの問題も発生しました。学校教育においても ICT 技術が導入され、教育のスタイルもまた大きな変革の時期を迎えています。

このように、私たちの先輩が「21 世紀は環境と情報の時代」と見越して設立した本学部は、まさに今、社会の中で重要な役割を果たすべき時を迎えています。そして、このキャンパスで巣立った卒業生は、「環境と情報」の分野で社会のリーダー的役割を担っていくのだと思います。

さて、環境分野にとっての「情報」というと、どうしても大容量のデータを処理するための技術、取得した環境情報を可視化する技術が中心と思いがちですが、地球環境の時代を迎えて環境意識の啓蒙や普及ということを考える時、人間社会における様々な情報の共有技術や伝達技術、人間や動植物など生命自身が持つ情報システムへの理解も必要となり、環境分野にとっての「情報」の範囲は増々広がっていると考えます。一方、情報分野にとって「環境」は扱う対象の一部として位置づけられるのかもしれませんが、情報技術は、今や政治や経済から医療や防災などの人間社会のほぼすべての分野で必要とされています。すなわち、「環境と情報」は「人間または人間社会」を通して、「環境と人間」、「人間と情報」というふうに繋がっているのではないかと思います。

前述してきたように、環境と情報の 2 分野は、社会の中ですでに市民権を得たのではないのでしょうか？我々人間の行為について環境に配慮することは当然のこととして受け入れられるようになってきたと思われまし、情報は常に我々の身近にあつて、空気のような存在になろうとしています。そうすると今度は、その逆のことが危惧されます。環境の劣化や情報の劣化に気付かない無頓着な社会になり、いつの間にか専門家もいなくなっているという社会が来るかもしれません。昨年 3 月 11 日に発生した地震とその後発生した原発事故は、我々の劣化した社会への警鐘であったように感じられます。そうならないように、大学は常にその分野の専門家の卵、リーダーの素養を持った人材を輩出し続けなければなりません。

この「情報メディアジャーナル」は横浜キャンパスで発行される「情報分野の専門誌」であり、別途発行されている「環境情報学部紀要」と合わせて、環境と情報に関する知見を大学が社会に発信する手段として、重要な役割を担っています。今後とも、内容が充実していき、読者が手に取って読み応えのあるジャーナルになって欲しいと思います。